

『現在の病像を越えていくために』

(2018年10月講座)

佐藤正博 (学術博士)

記録：伊藤規志子

【はじめに】

もともと私は理系の出身で、基本的には地球環境問題を中心にしてきました。ぶんかサイエンスカフェの初回は、「地球が誕生し生命が誕生して生命が進化して現在に至る過程と、赤ちゃんが誕生する過程とは同じ過程を踏んでいることのお話をしました（生命と地球環境の40億年の変遷）。2回目は、生きるとはある価値観を持って生きているのだが、生命とからんで価値をどう考えたらいいか、マルクスをベースにして価値のお話をしました（生命と経済学）。しかし、経済的な価値だけでは測れない観念の世界があります。今起きている病的な現象は、観念の世界から考えたらどういうことになるのか、お話ししたいと思います。

【こころと精神の進化史】

1. 植物性・動物性・人間性
2. 精神の進化史
3. こころの進化史
4. 個別的犯罪の諸相
5. 現在の病像

左(1)の植物性・動物性・人間性をどう考えるかは前回にお話ししましたが、再度ベース的なこととお話しします。

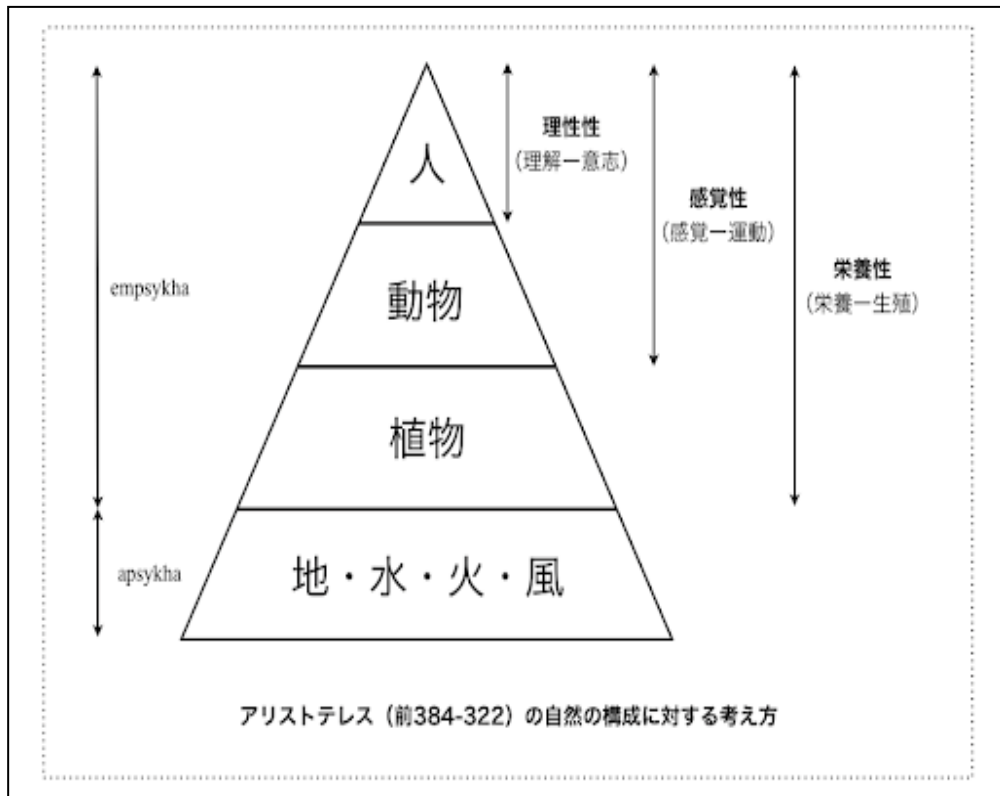
(2)の人間の精神はどう発展していったかをお話する予定でしたが、時間の関係で割愛させていただきます。

(3)では、人間の心はどのように成長してきたどのように形成されるか、お話しします。

時間があれば、(4)では、個別的犯罪の諸相として、個人的家族的な問題から生じた(社会から疎外された)秋葉原の連続殺人事件、神戸榊原事件などの殺害事件を中心にお話しできればと思っています(5)では、私たちが現在関わっている問題(日大アメフト問題、文部省の公文書書き換え問題、電通の自殺問題など)は、いずれも個々の違う問題として扱われるけれど、本当は全部共通した問題として考えられないかという観点から、「現在の病像」という形でまとめてみました。つまり、今回は(1)(3)(5)を中心にメンタルな病気に絞っていき、次回は精神の発展についてお話ししたいと思います。

1. <植物性・動物性・人間性>

アリストテレス 自然と生命の階層



アリストテレスは自然と人間について考え、すべての学問の礎を作った紀元前のギリシャ哲学者です。当時は(地・水・火・風)が自然であると思われていました。それを利用する植物があり、自然とのやりとりで花をつけ受粉(生殖)し実をつけます。動物は植物や動物を食べて生きていますが、「食と性」から考えると、動物と植物は反対の生き方をしています。植物は春に成長(「食」)して秋に実(「性」)をつけますが、動物はその実を「食」べ、秋から春先になって「性」に目覚め子供をつくります。動物は植物のように自分で栄養を合成できないから、地べたを這いつくばって餌を探さなければいけません。すなわち動物と人間は、感覚が発達して運動しないと食べていけないので、感覚-運動機能を持つようになりました。(図参照)さらに人間は、理性(理解と意思)があるのです。しかし、栄養性「栄養と生殖」から考えると、生あるもの、植物から人間に至るまで共通していると言えると、アリストテレスは言っています。(図参照)大きな間違いはないでしょう。植物器官は根からと光合成からの栄養で、花をつ

け実をつけます。同様な構造を実は動物も人間も皆もっているのです。

「食と生殖」を担うものは、植物器官（内臓系）から発生しています。そして生命の基本である「食と生殖」（内臓系）の構造は、植物・動物・人間が共通して持っているものなのです。ただ、人間の場合は脳が発達して理性を持つようになりました。

〈胚の進化〉

発生初期の生物のことを胚と言います。胚の進化を見てみますと、内胚葉（内臓）が先にできて、脳は後から形成されています。みなさんは脳が大事だから脳が先だと思われるかもしれませんが、脳より内臓の方が大事で、内臓を生かすために脳ができたのです。すべての生物の体は内臓から先にできて、内臓こそ一番大事なところなのです。

〈こころの原型～内臓感覚「不快」と「快」〉

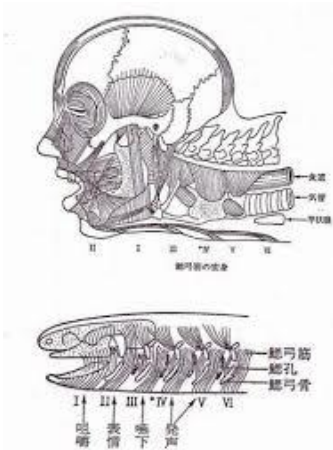
私たち感情は内臓から生まれてきます。例えば、大便小便が満杯に溜まってくると、気持ちが悪いでしょう。我慢するのは不快なので放出して快になります。基本的な人間の感情の快・不快は内臓のこのような感覚にあるのです。

〈こころ 脳神経系の五感〉

私たちは夕陽を見ると、何となく涙が出てきます。それから潮騒の音を聞いていると心が落ち着きます。私たちは遠く離れたものを、目・鼻・耳で感じることができますが、その遠感覚（離れたものを感じ取る力）には心に通じるものがあります。内臓は感覚器官ではないが、実は遠感覚と近いものを持っています。目・鼻・耳からくる遠感覚と内臓からくる遠感覚は、どちらも心に通じるものがあります。ですが、心の源は、内臓感覚からきているとされています。

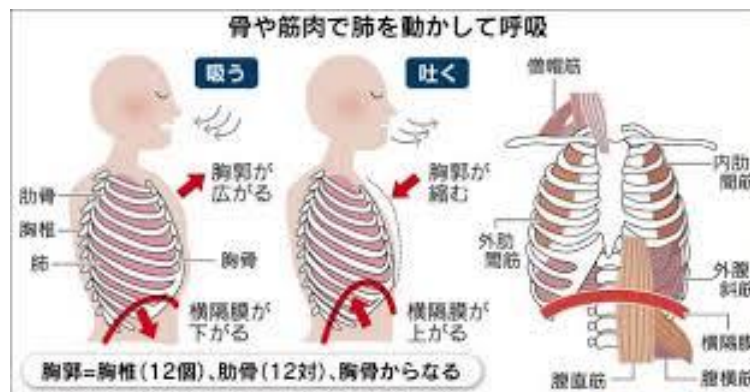
〈魚のえらの筋肉が表情筋に変身〉

その一つの例が、魚のエラ腸（えらと腸があわさったもの）から進化した人間の顔の表情筋にあります。図を参照してください。



魚はエラ呼吸をします。人間の顔の筋肉は、魚にあるエラを動かす呼吸筋肉（エラ腸）からきています。魚のエラは、人間の咀嚼、嚥下、発声の筋肉に変わっています。

もともと、魚の快不快を表す器官はエラ腸呼吸器官にありました。人間の目や口の周りにある表情をあらわす表情筋も、その魚のエラ腸からきています。エラ腸とは内臓の筋肉でできています。つまり、みなさんの顔に出てきている表情は、内臓の心が表情に出てきていると考えられます。（頭の骨は背骨が延長して覆いかぶさってできました）



＜肺を動かす筋肉＞

肺を動かす筋肉は面白いです。胸郭を広げたり縮めたりする筋肉や横隔膜を下げたり上げたりすることで、肺を間接的に縮めたり膨らませたりしているわけです。（図参照）肺そのものの筋肉は内臓筋でできていますが、胸郭や横隔膜を動かす筋肉は内臓筋ではないのです。心臓は生まれてからずっと動いていても疲れません。これが内臓筋の性質です。普通の内臓は止めることができないのです。

ところが、肺は息を止めることができます。横隔膜と肋間筋は脳が支配している筋肉です。人間が息を止めることは、死ぬことと同じ意味をもっていますが、**肺を脳が命令できる外側の筋肉に支配させたというのは重大なことなのです。**

なぜなら、内臓が脳のコントロールを受けるということは精神的な影響が内臓に影響するということで、元来内臓感覚であった「こころ」が脳で生じた「こころ」（脳感覚）の影響を受けるようになったことを意味し、この2つの「こ

ろ」が統一できないとき、うつ病や統合失調症など精神的な病につながると考えられるからです。

なぜ、このような状況に至ったのかを進化の過程から考えると、魚類が生き絶え絶えに上陸する時がありました。魚類の時代には酸素と二酸化炭素のガス交換は鰓（えら）で行われています。この鰓呼吸に参加していた骨や筋肉は上陸に伴い呼吸とは直接関係しない顎骨・舌骨・甲状軟骨や前に説明した表情・そしゃく・嚥下・発声などの運動をつかさどるように変化し、内壁系（消化器官・心臓・血管など）の鰓腸は退化し、その壁から風船のように膨らんで肺になります。肺は大きく膨らんだことで、自体で呼吸ができなくなり、外壁系（五感・脳・神経・骨格・筋肉など）の筋肉の助けを借りざるをえなくなりました。肺は必要に迫られて（上陸による必然性として）脳のコントロールを受け入れたのです。

<肺呼吸と脳>

二酸化炭素が溜まってくると呼吸中枢（延髄）が「深呼吸しろ」と命令を出しますが、驚いた時など大脳からも「息を止めろ」と命令がきます。

<こころ・からだと呼吸の公理>

心の行動も体の行動も生命の呼吸を妨げずには行わない

何かに集中する時、無意識に呼吸を止めています。運動すると息が上がってしまいます。心の行動も体の行動も、呼吸を阻害しないとできない、脳と内臓（肺）はそういう構造を持っています。統合失調症の人は、たらいの水で自殺することのできる場合があるようです。これは脳（意志）のコントロールで内臓を止めることができることを意味し、普通の人には脳の「こころ」と内臓の「こころ」が統合されているため、苦しくなるとタライの水から顔をあげてしまいますが、2つのこころの統合が失われていると自殺ができると考えられます。また、タライの水で自殺する場合と同じように、自分で自分の首を絞めて自殺することもできます。

なぜ、このようなことができてしまうのか。それはまさに人間個体の誕生の過程において上陸の段階で起こる異常なのです。（*上陸：人間も生物進化の痕跡を残して生きています。人間の胎児の世界でも胎内の海からの上陸を果たしています。35日目に肺胞ができ、38日目に肺に近いものできています。34～34日目に上陸を果たしているのです。）人間誕生の過程の上陸の段階で、なんらかの理由で、脳の「こころ」と内臓の「こころ」の統合が失われることによると考えられます。

〈言葉の発生〉

なぜ人間だけが言葉を持つようになったか。今までの内臓との経緯で言うならば、自然の呼吸を意図して妨げることで言葉を持つようになったと言えます。動物の鳴き声のファー、ウーは呼吸の延長で声帯を動かしているだけで、呼吸を妨げているわけではないのです。ところが、言葉発声の初期においては、例えば「葉っぱ」と音の分節化ができるためには、物凄い集中力が必要で、息を止めないとできないのです。以前私は子供が落ち葉を持って「葉っぱ」という言葉を発した時に居合わせました。「はっ」と息を止めてから「ぱ」と言っているのです。物凄い集中力です。成人すると（小脳のはたらきで）あまり意識しなくなるのですが、子どもの集中力（意志）は脳の発達のおかげだと思えます。この集中力で息を止めて言葉が誕生するようになりました。

3. 〈こころと精神の進化史〉

（受動的な時期）

誰もが「受動的だった時期」、それは授乳期です。母親のお乳がなければ栄養不足で死んでしまいます。排尿排便や歩行もできない、そんな時期の赤ちゃんは受身的で女性的です。母親の方は乳胎児に対して、積極的で男性的なのです。（フロイト）

受動的な精神構造はこの時期と関連づけられます。日本人は積極性がないとか受身的だとよく言われます。日本人は赤ちゃんを傍に置いて常におっぱいをあげています。常に母親がいて面倒を見ている。だから「甘えの構造」ができあがって受動的になるのです。

ところが西洋人はもともと、神の前にすべての人間は平等という考え方ですから、赤ちゃんだろうが大人だろうが平等に扱うので、赤ちゃんの時大人の世界と切り離すため、「甘えの構造」が形成されません。このため、西欧人などは能動的に行動せざるをえなくなります。

（個性の第一要因～無意識の形成～）

母親が非常に幸せな感情を持って赤ちゃんに接しておっぱいをあげていると、赤ちゃんにも伝わって、にこにこ笑います。ところが「収入が少ない」「夫が浮気しているのではないか」「以前の仕事に復帰できるか」などと悩んでいると、『子どもなんか生まなきゃよかった』と考えるかもしれません。それが、子供に

はわかっている『僕なんか生まれてこなきゃよかった』と、無意識の世界に刷り込まれてしまうのです。

母親が『なんで可愛い子だろう』と常に思っていると、子どもは常に守られている安心感で満足することができます。これがいわゆる無意識の形成で、このような積み重ねが実は個性なのです。

（乳胎児期の処遇のされ方～精神の安定・不安定～）

母親にいつくしまれ、しっかりお乳を飲まされる、下の世話も皮膚接触も充分になされると、子どもは成人になってからも、どんな厳しい世の中にあっても精神が安定しています。社会や会社の衝撃、個人的な衝撃（失恋）で落ち込んでも、普通の安定した人は2週間で回復しますが、うつ病になって回復できない人もいます。それは、無意識の世界に傷がついているかどうかの違いなのです。それは、自分でのりこえなくてははいけません。

完璧に子どもを育てたという人は皆無で、親には後ろめたいところがどうしても残ります。それが無意識の中に刷り込まれます。

（なぜ成人になっても精神的な差異が生まれるのか）

社会的ストレスに対して、自分では意識できない、どうしようもないところに無意識が作用してきます。では、なぜ、社会的行動によるストレスが（上司の叱責、失恋など）、乳胎児期の母親との関係に遡るのでしょうか。乳胎児期には、自分と外界の区別がつきません。幼児期になると共同体の意思と個人の意思は違うと区別がつくところまで成長してきます。ところが、母親から冷たくあしらわれていると、自分の心の傷が素直に解決できない状況に導かれて行ってしまうのです。共同体或いは社会で失敗したりすると、共同体と自分の区別がつかないところまで遡っていきます。

（学齢期・児童期と共同体との対応）

今の時代は大学や大学院に行く人が増えてきて、学童期がどんどん延びてきています。そこで母親からの自立、同性の友人関係、友達作りに失敗すると、「いじめ」が起こります。グループ化が進む段階で、入り込めない人や外れた人をいじめるわけです。（歴史では、女同士の集団、狩りをする集団のできる時期と対応）

（思春期と共同体）

思春期は、母親との無意識の性的関係から、異性を意識して異性に性的行動が行われるようになってきます。（歴史的には家族が集まった氏族社会から部族古代社会ができる段階と対応。性愛の決定権は家族親族に変わってきます）

（青年期と共同体）

青年期になると共同体、親族の意思と関係なく、個人の意思で結婚できるようになります。（歴史では、古代国家から近代国家になって現代に至る過程と対応、性愛の決定権は個人相互の意思に変わってきます。）

（タブーと共同体）

人間の精神の発展過程の背景には、国家社会の進化の過程が存在しています。特に男女の関係には結婚に関して昔からタブーがありました。性愛の問題は本来ならば自由なので問題は起きない筈ですが、問題が起きるとすると、社会全体の問題として考えてみなければなりません。

潜在的な個性は様々ですから、前に言ったように現代社会の問題は個人的には自己の過去に遡行していくことはあるとは思いますが、全体としてみたら、現代社会の問題は基本的には社会システムの問題として考えていかなければならないと思います。

5 〈現代の病状〉

現代の社会はどのような状況にあるかを見てから、どのように対処していけばいいかを考えていきます。

（産業社会の推移）

第1次産業（農業・林業・漁業）は大正9年がピークでしたが、今では5%くらいに減っています。第2次産業（鉱業・建設業・製造業）は1975~80年が最高で、それを境に減少しました。環境問題をやってきた私から見ると、1965~1975年は環境が汚染された時期で、第2次産業は環境汚染と結びついていましたから、第2次産業が減ってくるにしたがって環境はよくなりました。第3次産業（流通業・知識産業）は増加して70%を超えています。（世界的レベルでみると、先進国ほど経済が発展している国ほど第1次産業は

少ないです。日本はいずれ1%台になるでしょう。利益は2次3次産業の方が多からです。1次産業は（問題があるかもしれませんが）遺伝子操作や情報通信などの最新の技術で5次産業6次産業になってくる可能性があります。）

農業・建設業が減少し、今増えているのは情報通信と医療福祉です。

（産業構造の推移）

第1次産業は自然を相手にする産業で、第2次産業は自然を加工する産業、第3次産業は自然・企業・人間の間を仲介する産業です。産業構造の推移とともにエンゲル係数も推移してきました。最近エンゲル係数が25%前後まで下がってきています。これは第1次産業が衰退している根拠になります。所得の割には「食」に使う費用が少なくなっており、その分違った産業にお金が動いていることを意味しています。戦中から戦後にかけては、エンゲル係数は50%で、食べるために働いていました。

（価値の進化）

ではなぜサービス業に進化してきたか、衣食住の現実的な価値はほとんどかわらないのですが、サービス業の（きれい、かわいいなど）の抽象的な概念が増えてきたことと関わっています。見せかけの価値にお金が増えてきて、人間は抽象的なものを益々作っていています。

（現状のイメージ）

生活水準においては、バブルが崩壊しても60~70%の日本人は、中流だと考えています。2015年における一家の平均貯蓄率は1800万で、貯蓄と年収の比率は300%で、3年間何もしなくても食べていける財産があるほど豊かになってきました。中央値で見ると1000万になりますが、それでも半数以上の人は、1000万以上は持っています。そして50%以上の人々が現状の生活に満足しています。

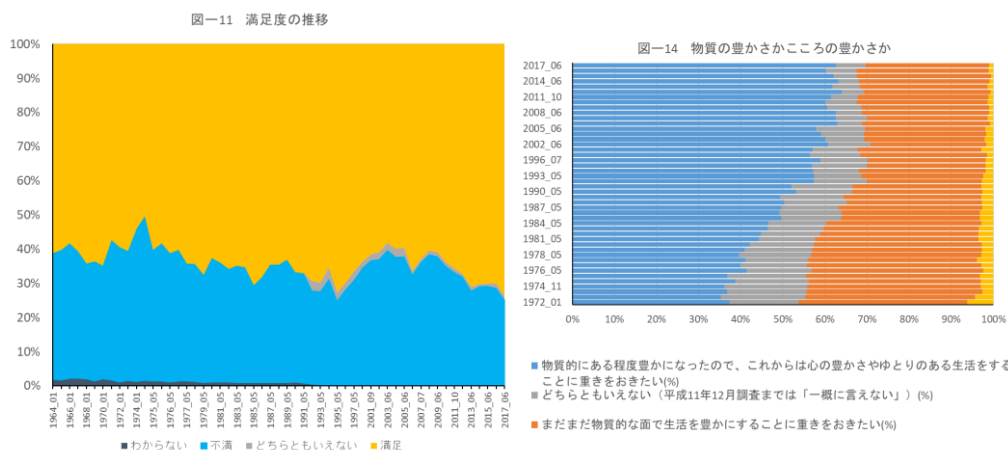
1975年から仕事に充実を感じる人の人数はほとんど変わっていません。一番伸びているのは友達と会う、趣味やスポーツに熱中するなどです。「仕事をしないで自分の時間を使いたい」と言って、心の豊かさを求めている人は50~60%です。

（高次産業社会の問題と対応 「時間」）

1 次産業中心の時代は、春に種をまき秋に収穫するといった自然のサイクルの流れに沿った「時間の流れ」でありました。2 次産業が中心になると、仕入れ・加工・製造の工程という自然には左右されない時間の流れとなりました。3 次産業（流通業・知識産業など）が中心になると、製品の仕入れ販売の工程になり、加工製造に拘束されない時間となりました。つまり、高次産業になるほど時間は短縮されていく傾向にあり、我々の意識はこの「時間の流れ」とは無関係ではありえません。アマゾンやヨドバシカメラの当日配達に見られるように、速度を速めています。広告・最先端の技術開発・芸術などでも同様に、「時間の流れ」に支配され、常に新しいものが要求され、休むことが許されない状況になっています。

（時間の流れと満足度 心の豊かさ）

言い換えれば、常に仕事を続けなければならない脅迫観念に取りつかれながら、どこかで逃避の願望が現れることになると考えられます。これをデータ（下図参照）から読み解けば、現状 70%は満足しているが、30%は不満が残る結果になっているのではないかと、この不満は「時間の流れ」のスピードに耐え切れなくなって、60%の人が精神的な「こころの豊かさ」を求めているものとして表れているのではないかと考えられます。



（自分の時間を持つ）

仕事を捨てられないのも現実なら、ゆったりしたいのも事実です。このジレンマは、社会システム全体にかかわるものとしてあり、誰でもが患っている病です。

仕事を続けることは「社会の時間（脳の時間）」に拘束されることであり、ゆったりした時間は「個人の時間（内臓の時間）」で生きることを意味します。現在の社会で生きていく限り「仕事」と「自分」、「社会的な時間」と「個人の時間」の相克の中で時間のバランスをとり、「自分」の時間をつくる必要があるように思われます。

日大アメフト問題、電通過労死問題、森加計問題、公文書改ざん問題など様々な問題が立て続けに起きているのは、「時間の流れ」の高速化が、自分のいる共同性から外される恐怖感を増長させているのです。この恐怖感は個人の意識と逆立していますが、組織の中で生きていくためには、やらざるを得なかったのです。

例えば電通の人は高速化した時間の流れにさらされると、たとえ個人的には違和感があっても、「共同性」と「自己」との区別がつかない状況に陥ります。いわゆる乳児期に落とし込まれると、「共同性」を守ることが主体になり、現実的な個人の意識を占有するようになります。なぜ個人の観念より共同性の観念を優先させてしまうのでしょうか。本当の現実性は、自分を守ることしかないはずですが、「上司に、はずされるのではないかと」考えてしまうのです。（乳児期には共同体と自分の区別がつかないですが、その時期に落とし込まれてしまいます）

なぜ個人の観念より共同性の観念を優先させてしまうのでしょうか。会社とか国家とか共同体はみんな幻想です。自分の肉体が現実であるにもかかわらず、会社や共同性を現実と勘違いしてしまうのです。その他の日大アメフト問題、森加計問題、公文書隠蔽問題なども、個人的にはやりたくないわけですが、個々の人間の心理的世界と逆立して、つまり反心理的なものに転嫁してしまっているにもかかわらず、しかし、組織で残っていくためには、組織の中でうまく流れていくためには、やらざるを得なかったのです。自分と共同体は逆立していることに気が付かず、共同性の方がいい、現実だと勘違いしています。そのために社会を守るために自分が犠牲になってしまいます。しかしながら、それは逆です。

吉本隆明の本の「共同幻想」にも同じことが言われています。「人間はしばしば、自分の存在を圧殺するために、圧殺されることを知りながら、どうすることもできない必然に促されて、様々な負担を作り出すことのできる存在である」
「共同幻想もまたこの種の負担のひとつである。だから人間にとって共同幻想は個体の幻想と逆立する構造を持っている」

人間にとって国家とか会社とかいったものは共同幻想です。宗教や法も同様に共同幻想です。そういったものを現実だと勘違いしています。共同体の理念です。

制度の世界を共同なる幻想の世界と考えるが、幻想の世界は観念の世界ではないのに、現実の世界と勘違いしてしまいます。

例えば第 2 次世界大戦でも、個人的には人を殺したくなくても、共同体の中では人を銃で殺してしまいます。

<禁制と共同性>

禁制によって支配された共同性は、どんなに現代めかして真理に、ラディカルな姿勢に見えても、実は未開を伴った世界です。法律も宗教も禁制です。宗教になってくると、自分が救われたい心理が二の次になってきます。

生活共同体からはずされる恐れがある限り、共同体的なものとの生活とが区別できていないと言えます。タブーは権力を必ず作っていきます。タブーを決めると、それに縛られるようになります。どうしても共同体を作る必要があるのなら、すべてオープンにして、出入りを自由にし、指導者をいつでもリコールできるようにすると、自分と共同体が共生できるのではないのでしょうか。

<自立すること>

結局私が言いたことは、ここなのです。結局、現在違和感のある様々な問題が起こっているのは、吉本が言うように「黙契の体系である生活共同体からの自立の恐れと、自分の中にある未開性が自分の意識の中で自分と区分できていない」からです。この問題を越えていくためには、自立が必要なのです。嫌だったら嫌と言えばいいのです。

現状を水平視線だけで見ただけではなく、高度を変えていろいろな違った視点から見られるようにすることで、自立できるようになります。1~2m、数 10 m、数万 km、数億光年・・・など、高度を自在に変えることは可能です。いろんなものに束縛されることはなくなります。視線が 1~2m の高さなら、まだ共同体に組み込まれてしまいます。嫌だったら共同体と離ればいいのです。なにも共同体の価値観に従って行動を規定されなくてもいいのです。

家庭があり、友人がいて、会社や地域があり、国家がある、さらに高度を高めれば国家さえ消えて地球全体となり、さらに数 10 光年先へと進めば、地球さえも見えなくなってしまいます。自由に高度を変える知恵を獲得することが、自立につながります。あらゆる共同体から自由になることができるような空間を獲得することが、様々な問題を乗り越えるヒントになると思われます。自立とは、今置かれている時空に対して垂直性（自在性・自由性）を獲得することだと思います。